

## 「後京極百番自歌合」について

片 山 享

にしたい。

この良経百番自歌合の伝本は比較的少く、睨目しえた伝本は十本に過ぎない。そしてこの歌合伝本は、早くから本文に乱れがあったようで神宮文庫本奥に「此本不審之間、以彼家御集秋篠月清集証本校合者也」とするなど、優れた伝本に乏しいのである。

最初に諸本の書誌的解説を加えておく。

### 1 群書類従本（略号 類）

群書類従巻二百十九・和歌部七十四・自歌合三に所収。板本では一冊本である。右の巻序を記した次に外題と思われる「後京極殿御自歌合」があり、次に内題「百番調合（或成節判）」とあって以下本文。

刊本は若干の誤植および翻刻の際の方針によると思われる小異がある。板本は和歌一首一行・一面十行書、四二丁。奥に

(1)三品神門者、当世之貴老、我道之師匠也、仍為蒙其芳命、以愚詠所結卷也、柔爾柿本之塵、定類格合之石、努莢及外見

いわゆる後京極殿御自歌合（群書類従本）とよばれる建久九年良経百番自歌合は、後京極殿百番調合（東大図書館本）後京極百番自歌合（伊達文庫本）後京極自百番自歌合（松平文庫本）後京極百番自歌合（尊経閣文庫本）後京極撰政殿自調合（彰考館文庫本）百番自歌合（永青文庫本・書陵部本）百首自歌合後京極殿御自歌合（神宮文庫本）などのごとく、さまざまの外題を有するが、内題は歌合部類本に百番自歌合とあるほか、諸本いずれも「百番自歌合」とあって、これら外題は樋口芳麻呂氏が述べられたごとく後人の称呼というべく「百番自歌合」とする永青文庫本・書陵部本のごときがもとの形であったと考えられる。しかし、他の百番自歌合と区別するため、本稿では便宜的に尊経閣文庫本にみえる「後京極百番自歌合」の称によること

千時建久九年仲夏二日

むすひをくことは露のいかなればさのみは玉の声ゆらくらは(マア)

依仰乍恐注付之 老比丘釈阿生年八十五

玉ならぬことはも君にみかゝれてとまらん代々の光とそなる

(2) 凡歌合判詞、自天徳始干今不絶、然而上古末代不可有比類哉

(3) 貞和五年七月十二日於今小路宿書写之

(4) 五条禅門各判之鬮書加 定家

(5) 右後京極殿御自歌合、以清月集校合(マア)

(2) の奥書は後述する永仁四年本諸本に「建暦二年六月二日書写之」とあつて次に(2)の讒語が記されており、樋口氏が指摘されたごとく、貞和五年本奥書は建暦二年云々を欠いたものと思われる。(4)の讒語が貞和五年(一三四九)の奥書の後にあるのは不審である。

後人の付したのか、ただし、後述する同系統文明十六年書写本系の永青文庫本・書院部本にもこの位置にあり、貞和五年本奥書にあつたものと思われる。

群書類従本は本文必ずしも誤写がないとは云えないが、諸本中最も整つた本で貞和五年本の佛を伝え、現存本で欠脱のない唯一の本である。

2 東京大学図書館本(E31・一五三七)(略号 東)

薄黄表紙、袋綴一冊、縦二七・七釐、横二〇・二釐、題簽左肩に

「後京極殿百番鬮合 判者五条俊成卿 全」とあり、第一丁に「後京極殿御自哥合」「百番鬮合 俊成卿判」とある。和歌一首一行・一面十四行書・料紙楮紙、墨付二六枚、江戸末期写。奥書は類従本奥書(1)―(4)の次に「右群書類従」とあり、群書類従本の写か。ただし本文三四番右歌・六十九番左歌・八十九番右歌を欠き、写は粗笨である。

3 永青文庫本(一〇七・三六・七)(略号 永)

薄黄表紙、袋綴一冊、縦二五・八釐、横二〇・二釐、題簽は左肩小短冊に「百番哥合」とあり、一枚遊紙、第一丁に内題「百番鬮合」、和歌一首一行(ただし下句二・三字を行がえする)一面十二行書。料紙楮紙、墨付三六枚。奥に

(1) 三品禅門者、当世之遺老、我道之師匠也、仍為蒙其昔命、以愚詠所結番也、景柿本殿、定類梧台之石、努々莫及外見、千時建久九年仲夏二日

結びをくこと葉の露のいかなれば

さのみは玉の声きこゆらん

依仰乍恐注付之 老比丘釈覺

玉ならぬこと葉もきみにみかかれて

とまらん代々の光とそなる

(2) 凡歌合判詞、自天徳始之干今不絶、然而上古末代不可有比類哉

(3) 本云

貞和五年七月十二日於今少路宿所書写之云々

(4) 後京極殿御詠

五条禅門各判之詞書加 定家卿云々

(5) 文明十六年正月廿五日書写之早

慶長五 四 廿三日

(6) 以 勅本奉書写校合訖

慶長五年仲夏中納 玄旨(花押)

とある。(傍点は類従本との字句の異同) 奥書(6)は幽斎玄旨筆で、いわゆる玄旨奥書本である。一番・十七番・卅四番・九十六番の判詞に一部欠脱があるが、類従本と異文があり、類従本を補って重要、歌頭に新・勅・統後撰の集付を記す。

4 書陵部本(五〇一・六一六)(略号 書)

菊花薄背模棧表紙、袋綴一冊。縦二八・三種、横二〇・六種。題

籤は左肩小短冊に「百番哥合附秘哥」、遊紙前後各一枚、内題合、

「百番調合」、和歌一首一行、一面十二行書。三三丁表まで百番歌

三三丁裏より三四丁裏にかけて「應秘哥 西園寺殿」があり、合綴

本である。本文料紙楮紙、江戸初期写。奥に永青文庫本奥書(1)―(5)

がある。ただし俊成の歌は

玉ならぬこと葉もきみにみかかれ(ママ)

とまらん代光とそなる

とある。(5)の「慶長五・四・廿三 一校早」の注記はもろろんない。永青文庫本と同一系統本であるが、集付はなく、また写は永青文庫に比して若干の誤写がある。

5 伊達文庫本(宮城県立図書館・伊九一一・二八・九)(略号 伊)

薄茶表紙、楮紙四枚を重ね内側に折り曲げている。縦二三・〇種・横一六・五種。遊紙前後各二丁、本文料紙鳥ノ子、列帖装を後に補綴している。題籤は左肩に打つけ書きで「後京極後京極百番歌合全」とある。

内題「百番歌合 後京極撰政太政大臣」和歌一首一行・一面十一行書、墨付三七枚、江戸初期写。奥に

(1) 本三品禅門者、当世之道老、我道之師匠也、仍為家毀其芳命、以

愚詠所續卷之、袋汚柿木塵、定類楮台左イ、努々莫及外見一二無

干時建久九年仲夏二日

むすひをくこと葉の露のいかなればさのみはたまの雨はきこゆらん

依仰乍恐、老比丘釈阿生戒八十五

御返し

たまならぬ言葉も君にみかかれてとまらぬよゝのひかりとそ成

(2) 本云

建暦二年六月二日書写に、凡歌合判詞に天徳始之干今不絶、然而末代不可有比類哉

(3)本云

永仁四歳五月十日、以大納言法眼御坊自筆本書写之

とある。六番右歌下句欠、十五番・七十番判詞欠。三十三番判詞一部欠などの欠脱がある。また本書にはところどころ六個所に勝負付を記している。

6 松平文庫本(一三八一四七)(略号 松)

青表紙蓮花紋模様、袋綴一冊、縦二七・五釐・横二〇・一釐、題籤左肩に小短冊「後京極自百番哥合」。遊紙前後各二丁、内題「百番哥合後京極摂政太政大臣」、和歌一首二行分ち書、一面九行書、料紙斐楮混漉、墨付五八枚、江戸期写。奥書は伊達文庫本(1)(3)に同じ。ただし(1)の良経詠の結句は「こゑはきくらむ」(2)「木云建暦二年六月二日書写之」とある。六十九番右歌欠、三十番、三十三番判詞が一部欠脱しているが、最も大きな異同は七十七番に七十八番の歌・判詞があり、七十八番が空白になっていることである。

7 尊経閣文庫本(略号 尊)

薄茶表紙、袋綴一冊。縦二五・八釐、横二〇・二釐。題籤左肩に打ちつけ書で「後京極百番自歌合 全」とある。内題「百番歌合 後京極摂政太政大臣詠歌」、和歌一首二行分ち書、一面十行書。料

紙楮紙、墨付五七枚。江戸期写。奥書は松平文庫本と同じ。ただし(2)は「建暦二年六月一日」とあり、また(3)に「以大納言法眼御坊」とある。本文欠脱は松平文庫本と同じ。ただし六九番右歌の欠脱はない。

なお、前掲樋口氏解題によると、同氏蔵阿波国文庫旧蔵本は松平文庫本・尊経閣文庫本と同じく、七十七番に七十八番歌判詞が入り、七十八番が欠脱しており、かつ奥書に建暦二年奥書、永仁四年奥書があつて次に「慶安元年九月十四日」とあるよして、松平文庫本、尊経閣文庫本と同一系統本と思われる。

8 彰考館文庫本(巳一三・〇七二四七)(略号 彰)

表紙烏ノ子、列帖装一帖。縦一六・〇釐、横一五・六釐、枳形本。題籤は左肩に「後京極摂政殿自哥合」、内題「百番哥合」。和歌一首二行分ち書、一面十行書。料紙烏ノ子。裏表紙は薄茶紙で、表表紙が剥脱したものか。室町期写。墨付五六枚。奥書はない。七十七・七十八番の異同は松平文庫本と同じであるが、判詞の一部が欠脱多く、二十六番・三十番・三十三番・四十三番・百番に欠脱がある。

9 歌合部類本(略号 部)

貞享二年板の歌合部類本の内である。奥書は

老比丘釈阿生歳八十五

むすひをくこと葉の露のいかなればさのみは玉の声聞ゆらん

御返し

玉ならぬこと葉も君にみかゝれてとまらむ世々のひかりとそなる

千時建久九年仲夏二日

とある。欠脱は尊経閣本に同じ。詳細な集付がなされており、九十九番を除く各番に勝負付がなされている。

10 神宮文庫本(三一一〇二六)(略号 神)

紺表紙、袋綴一冊。縦二七・三釐、横二一・三釐。題簽左肩に「百

首哥合後京極殿御歌書全」とある。内題「百番歌合後京極殿良経目所合

和歌一首一行・一面十一行書。料紙楳紙、墨付三六枚。奥に、

此本不審之間、以彼家御集秋篠月清集証本校合者也

明応七年閏十月五日 友弘

とある。友弘は坪述歌師宗諷の俗名である。この本は二十番詞書を欠き、十七番判詞に欠脱があるが、最も大きな異同は四十七番と四十八番の歌および判詞が入れ交っていることである。他本に比して異文が多く、特に九十七番右歌の詞書は、

百首哥書出て給ふへき也、三位入道の許へ消息して侍りければ、  
書て送るとて成家朝臣(作)か作給の事などありておくに「云々(傍点

他本との異文)のごとき他本に見えない異文がある。貞和五年本系統本からの書写と思われるが、異文が多く一別本と見るべきか

と思われる。また各番に勝負付を記している。

以上が諸本の概略であるが、諸本奥書にみられるように二系統本がある。一つは貞和五年本系(群書類従本・東大図書館本・永青文庫本・書院本)であり、今一つは永仁四年本系(伊達文庫本・松平文庫本・尊経閣文庫本)である。貞和五年本系は少なかったようで、歌合部類本七十八番欠脱の個所に、

此番雖類本考不見

と記している。歌合部類本は欠脱歌からみて永仁四年本末本に属するが、勝負付を記すなど他本と異り、また異文が多い。神宮文庫本は本文内容からみて貞和五年本系統かと思われるが、諸本に比して極めて異文が多く、かつ勝負付をもち、別本とすべきである。

以上の諸本系統をさらに詳細にみるために、本文異同について検討したい。諸本の本文異同の主要なものを表示すると第一表のごとくである。

第一表について、最も重要な異同は神宮文庫本の四十七番と四十八番の排列異同と松平文庫本・尊経閣文庫本・彰考館文庫本・歌合部類本などの七十七番に七十八番が入り、七十八番が欠脱していることである。

神宮文庫本の異同は、諸本が四十七番左「冬の比字治にまかりて

第一表 諸本主要異同表

	類	東	永	書	伊	松	尊	彰	部	神
一番 判詞一部欠			○	○						
六番 左右詞書欠			○	○						
六番 右歌下句欠					○					
十二番 左詞書欠								○		
十五番 判詞欠										
十七番 判詞一部欠				○						
二十番 右詞書欠										○
二十五番 判詞一部欠			○	○						
二十六番 判詞一部欠										
三十番 判詞一部欠										
三十三番 判詞一部欠										
三十四番 左詞書異				○	○	○	○	○	○	
〃 右詞書異				○						
〃 右歌欠	○									
四十一番 右詞書欠										○
四十三番 判詞一部欠										
四十七番⇓四十八番										
四十九番 右詞書異				○	○	○	○	○	○	
五十三番 左詞書欠					○					
六十一番 右詞書欠										○
六十五番 左詞書欠				○	○	○				

六十九番 左詞書歌欠										○
〃 右詞書欠										
〃 右歌欠										
七十番 左詞書欠										
〃 判詞欠										
七十二番 右詞書欠										
七十四番 右詞書欠										○
七十五番 右詞書欠										
七十六番 詞書異										○
七十七番⇓七十八番										○
七十八番 欠										○
八十番 詞書異										○
八十九番 右歌欠										○
九十二番 右詞書欠										
九十六番 判詞一部欠										○
百番 判詞一部欠										○

よみ侍る」右「冬のうたあまたよみける中に」、四十八番左「同」右「同」とあって、四十八番左右は冬哥であるが、神宮文庫本は四十七番・四十八番がそのまま入れかわり、四十七番左右詞書なく、四十八番左「冬(ママ)のころを宇治にてよめる」右「冬の哥あまたよみける中に」となって四十七番は四十六番右「庭箱」を受けけることになる。右の四十七番左右歌は月清集一二七〇と二二六九の歌で冬部巻

頭の「ふゆのはしめに」と詞書のある四首中の二首であつて、明らかに冬歌であるから神宮文庫本の排列はあやまりである。

松・尊・彰・部本の異同については、左の詞書に

左 月の哥よみけるなかに(松・尊)

左 (詞書なし) (彰)

右持旅の歌よみける中に (部)

となつていて必ずしも同一ではない。すなわち松・尊本は他本の十七番左の詞書をそのままにして七十八番の左歌「公卿勅使に伊勢へ下されける道にて」の詞書をもつ「はるかなる」の歌を書き入れる不合理を言っているのである。彰考館本は詞書を省くことによつて合理化し、歌合部類本は「旅の歌よみける中に」とあるが、これは元来七十八番以下は旅部であつて、現に右の四本を除く諸本には「旅」の部立名を記しているのであり、「はるかなる」の歌の詞書を七十九番の詞書を借用することによつて合理化したものである。いずれもあやまりであるが、松・尊本は謄写の過程を示しているといえる。

ところで右の四本は永仁四年本系統本であることは奥書によつてある程度確めうるのであるが、三十三番判詞に、

心もしらぬまつ<sup>1</sup>の風かなと侍る心、誠に難有見え侍を、左の月より西<sup>2</sup>といへる姿心、猶限なくみえ侍るにや、<sup>3</sup>仍左勝と可申にや<sup>4</sup>、<sup>5</sup>仍左勝と可申にや<sup>6</sup>

(類)

(校異) 1心も……左の一ナシ(伊・松・尊・彰・部) 2姿心一姿(神) 3みえ侍るに一侍にや(神) 4仍一ナシ(伊) 5左一左を(伊・松・尊・彰) 6可申にや一可申侍らん(伊) 可申哉侍らん(松・尊・彰・神) 申侍らん(部)

とあつて小異はあるが、伊・松・尊・彰・部本いずれも前半の判詞を共通して欠脱している。また四十番右詞書は「同屏風に仙家に菊咲たる所」(類)は「仙家」(類・東・永・書)「仙宮」(伊・松・尊・彰・部)「仙洞」(神)とある。因みに月清集では「山中に菊盛にひらけたる辺に、仙人ある所」である。四十九番右詞書は「粟」(類・東)「零」(永・書)「雪」(神)が伊・松・尊・彰本はいずれも「同」、部本は記入なし。(部本、同はいずれも記入なし) 四十九番判詞で「けふもみそのふるさとはといへる古今のうた覚えていみしくおかしくは侍を」云々とある「古今のうた」は伊・松・尊・彰・部本いずれも「いにしへいま」となっている。神本は「 集」と(二字欠字)とある。右のような次第で伊・松・尊・彰・部本は永仁四年本系統として同一系統本に位置づけられる。もつとも七十六番では

右 昔熊野へまいりし事をおもひ出てよめる

まれになる跡をたつねしくまの山みしむかしより憑そめてき<sup>1</sup>  
<sup>2</sup>まれになる跡をたつねしくまの山みしむかしより憑そめてき<sup>3</sup>  
<sup>4</sup>神路山春、熊野山希なる跡、是又いづれとなく覚ゆ、めくみも<sup>5</sup>

久しく侍らん、又勝負なかるへし

(校異) 1 熊野(芳野(伊)よしの(松・彰)吉野(尊)2 まれになる  
—まれらなる(永・雷・神)3 たつねし—たつねて(伊)4 くまの山—  
よしの山(伊・松・彰)吉野山(尊)5 熊野山希なる跡—くまのの御山  
のまれなる跡そ(神)くまのやまむかしの跡(部)よしの御山のむかし  
のあと(伊・松・尊・彰)

とあり、八十番右詞書「月の哥あまたよみける中に」の「月の哥」  
は「同哥」(伊・松・尊・彰)とあり、歌合部類本のみは永仁四年  
木系とはいひ、貞和五年本と同一になる箇所もありいわば貞和五  
年木系が混入しているといつてよい。七十六番判詞が最もよくその  
傾向を示している。しかし七十七番、七十八番欠脱の基本的な異同  
を持つところから松・尊・彰系統本の異本と位置づけるべきであろ  
う。

以上のことから後京極百番自歌合の諸本分類に次のように纏める  
ことができる。

第一類本

A 群書類従本・東大図書館本

B 永青文庫本・書陵部本

第二類本

A 伊達文庫本

B 松平文庫本・尊経閣文庫本・彰考館文庫本(樋口氏蔵阿波)

国文庫旧蔵本

C 歌合部類本

第三類本

神宮文庫本

二

ところで、後京極百番自歌合諸本には右の諸本分類にかかわら  
ず、松野陽一氏が指摘されたごとく歌合判詞の評語「優」「艶」に  
関する重要な異同がみられる。諸本における優・艶の評語例はすべ  
て十四個所にあらわれるが、それを表示すると次のごとくである。

第二表

	六 番 判 詞	十 八 番 判 詞	二 十 四 番 判 詞	二 十 五 番 判 詞	四 十 番 判 詞	四 十 一 番 判 詞	類	東	永	書	伊	松	尊	彰	部	神
	艶	艶	艶	艶	艶	艶										
	えん	艶	艶	艶	えん	えん										
		ゆふゆふ	ゆふゆふ	ゆふゆふ												
		優	優	優												
		いう	いう	いう												
		艶	艶	艶												
		艶	艶	艶												
	ゆう	ゆう	えん	えん												
		えむ	えむ													



四十五番判詞	飽									えむ
六十一番判詞	飽	飽	ゆふ	ゆふ						えむ
六十九番判詞	えん	えん	ゆふ	ゆふ	ゆう	いう	飽	飽	飽	えむ
七十番判詞	飽	飽	飽	飽	(欠)	飽	飽	飽	飽	えむ
七十三番判詞(1)	えん	えん	えむ	えん	優	いう	飽	飽	飽	えむ
・	(2)	えむ	飽			えむ	えむ	飽		えむ
・	(3)	いふ	優	ゆふ		ゆう	いう	優	優	優
八十五番判詞	飽	飽	飽	飽	飽	えん	飽	飽	飽	えむ

(注) □は欠字、(欠)は判詞欠文

右について、優・飽以外の評語をもつ判詞をあげると、

六番判詞 殊に飽に侍るにや(類) — ことに見え侍にや(神)

二十四番判 詞ことに飽に聞て勝負懸分侍(類) — 殊きこえて勝

劣れいの分かたく侍る(神)

七十番判詞 殊に飽にみえ侍(類) — 殊勝に侍り(神)

七十三番判詞 何となくえむにもきこえ侍るを(類) —

何となくたへにもいふ事にもきこえ侍るを(書)

とあって、いずれも書写の際のあやまりとみてよいであろう。また  
 諸本に優飽の評語がなく一本にみえるものとしては

四十一番判詞 右ねぬよのはてのあかつきの空、姿心ゆうに侍にや

猶むねにあまる心ちし侍る(部) — 又右のねぬ夜のはての曉の  
 そら、すかた心、かにかくのこゝとく侍るにか、右の哥猶むねに  
 あまる心地し侍る(類)

とあるが、右について諸本の異同は、「又右の」— ナシ(伊・松)  
 「かくのこゝとく侍にか」— かくのみ侍るにや(永・書) かくのみか  
 侍るにか(伊) かくの侍にか(松) 侍にか(彰) であって、永仁四  
 年本諸本は松・彰のこゝとく意味不明の文になっていて乱れがある。  
 前述の歌合部類本の性格からおそらく恣意でつけ加えたものである  
 う。

#### 四十五番判詞

露のよすかに秋かれてと侍る、いみしくありかたく侍るを、何  
 に残さむ草の原といへることもえむにきこゆ、心中に心今少ま  
 さると可申哉侍らん(神) — 露のよすかに秋かれてと侍、い  
 みしくありかたく見え侍るを、<sup>1</sup> 何にのこさむ草のはらといへる  
 はたはり、<sup>2</sup> 殊に聞え侍る、<sup>4</sup> 心今少は勝と申へく哉(類)

(校異) 1 見え— ナシ(永・書) 2 はたはり— わたり(伊・松・尊・彰  
 ・部) 3 殊に聞え侍る— 殊に聞ゆる(永・書) 飽に聞ゆ(伊・松) こと  
 にきこゆ(尊・彰・部) 4 心今少は— 心を今少は(伊) 心を少は(松)  
 心を少は猶(彰) ころをみは猶(尊) 右は少(部)

とあって諸本異同がある。特に貞和五年本系は「草のはらといへる

は・た・は・り」の誤写があり、これは永仁四年本系の「草のはらといへるわたり」がよい。この歌は六百番歌合冬十三番枯野左歌で判に「左何に残さん草の原といへる、艶にこそ侍るめれ」とあり、神宮文庫本の判詞もあながち否定しすることはできないが、自歌合判の諸本からみてやはり神宮文庫本の異文とすべきもので、あるいは書き加えてあったかもしれない。

ところで、二十四番・二十五番・四十番・六十一番・六十九番・七十三番(1)の諸本異同には右に述べた個々の諸本異同というより、諸本の類型的異同が感じられる。すなわち(甲)類・東・尊・彰、(乙)永・書、(丙)伊・松、(丁)部、(戊)神であるが、(丁)はその性格から(丙)(甲)を混入した派生本と思われ、(戊)は前述の異同を除外すれば(甲)になるわけで、基本的には甲乙丙類型が考えられるわけである。しかし、これは前項で述べた諸本分類と明らかに矛盾し、貞和五年本系の中に甲乙丙類型があると同時に、永仁四年本系統の中にも甲丙類型があることになって、書誌的に納得できない現象を呈しているのであって、現在のところ、文献の面からは合理的な説明は不可能であるといつてよい。ただ乙丙類型をくらべると、丙のみが七十三番(1)に優があつて、乙より丙の方がより優に対する傾斜が強いことである。そして乙と丙類型の間に何らかの関係が当然予想されるのであるが、これは諸本分類からみて否定せざるを得ない

いわけである。

そこで俊成の優・艶の用例から、その蓋然性を探ることを試みたい。もっとも優・艶は古典主義的な俊成の詠歌理念の中で中樞を占める美的理念であるが、例えば六百番歌合・夜恋・三十番で「左の小夜の手枕、右の夜床の塵、共に優には侍るに取りりても、猶かきやる小夜の手枕、殊に艶に聞え侍り」ということく、両者はそれぞれ独自の美的内容を内包しつつも重なり合う面をもっているわけで、慎重を要することは勿論である。次に問題の判詞を掲げる

(1) 廿四番 右 卵

鳴せみの羽にをく露に秋かけて木かけ涼しき夕立のこゑ

……又はにをく露に秋かけてといへる心、ことに艶に聞て、勝

負難分侍、仍持とすへし(類)

(校異) 1夕立のこゑ—夕暮の田(永・書) 夕くれの田(伊・松・部・神) 2又—ナシ(伊) 3ことに—庭に(伊) まことに(松) 4艶に—ゆふに(永・書) 優に(伊) いうに(松) 5勝劣難分侍—勝劣難分侍り(永・書) 勝劣分かつ侍り(松) 勝負分かつ侍り(彰・部) 6持とすへし—持とす(伊・松・部)

(2) 廿五番 右 同

袖にちる萩のうは葉の朝露になみたならはす秋の初かせ

……右の哥、袖にちるとをきて、涙ならはすといへる末の句まていみしく艶に覺え侍れば、また勝負難分見え侍れと、さのみ

持と申も又無念に侍る上に、なみたならばす心、袖もしほる心地して侍る、今少可勝哉

(校異) 1 ならばすーならば (伊) 2 右の哥ー右の (伊・松) 3 艶にーいふに (永・書) 假に (伊) いろに (松) 4 勝負難分見え侍れとー勝負難分侍れと (永) 勝負分見え侍れと (書) 勝負分かたく見え侍れと (彰・部) 5 袖もしほる心地して侍るーナシ (永・書)

(3) 四十番 右 同屏風に仙家に菊咲たる所

君が代に匂ふ山路のしらさくはいくたひ露のぬれてはす賢

……右のうた、いくたひ露のと侍る心限なく、祝の心の上に艶にも聞え侍れば、右哥勝や侍らむ

(校異) 1 同ーナシ (永・書・伊・松) つきなみの (神) 2 仙家ー仙宮 (伊・松・尊・部) 仙洞 (神) 3 所ー所を (永・書・尊・彰・部) 4 艶にもーにも (三字欠字) (永・書) 假にも (伊) いろにも (松) ゆうにも (部) 5 右哥ー右 (永・書・伊・松・尊・部) 右の (彰・神) 6 勝や侍らむー勝へきにや侍らむ (永・書) まさるへきにや侍らん (伊・松・尊・彰・部・神)

(4) 六十一番 左 後朝恋

今はとて涙のうみに柁をたえおきそわつらふ今朝の舟人

左、泪の海、かの狭衣と申物語なんとおもひ出られて、殊に艶に覚え侍、まさると申へきや

(校異) 1 左左の (永・書・伊・松・尊・彰・部) 2 かのーナシ (永・書・部) 3 殊にーナシ (伊・松・尊・彰・部・神) 4 艶にーゆふに

(永・書) ゆうに (伊) いろに (松) 5 まさると申へきやーナシ (伊・松・尊・部) まさるへきや (神)

(5) 六十九番 左 遇不逢恋

うつろひし心の花に春かれて人も梢にあきかせそふく

右 寄風恋

いつもきくものとや人のおもふらんこぬたくれの松かせの声

此つかひ、又心の花のといひ、物とや人のなといへる心、をのえんにして勝負又難分、仍持とすべし

(校異) 1 花にー花の (永・書) 2 寄風恋ーナシ (松・彰) 3 欠吹 (松) 4 又ーナシ (彰) 5 花のー花に (永・書・松・尊・部・神) 6 えんーゆふ (永・書) ゆう (伊) いろ (松) 7 又ーナシ (永・書) 7 仍持とすへしーナシ (伊・松・尊・部)

(6) 七十三番 左 別恋

忘れしの契りをたのむ別かなそら行月の末をかそへて

右 舟中恋

浮舟のたよりもしらぬ浪路にもみし面影のたえぬ日そなき

此番、勝負分かたく見え侍り、大方は申も恐れ侍共、哥はよそへ、其よりえんなる所の名なんと侍らねと、左のわすれしといひ、右はたよりもしらぬ波路にもなんといへる姿調つかひ、何となくえむにもいふにもきこえ侍るを、世の人は心えす侍なるへし、いつかたもおとると申かたし、持とすへし

(校異) 1 見え侍り侍り(永・香) 侍るを哥(神) 見え侍る(伊・松  
・尊・彰・部) 2 恐れ一恐れは(永・香) 3 哥はよそへ一哥は(永・香)  
そのよそへ(神) 4 其より一ナシ(伊・松・尊・彰・部・神) 5 えん一  
優(伊) いう(松) 6 名なんと侍らねと一名などの侍らねと(永) 何と  
侍る(神) 7 左の一左(神) 8 浪路にもなんと一浪路にといへる  
(伊) 9 何となく一なにと(松) 10 侍るを一ナシ(伊・松・尊・彰・  
部) 11 世の一余の(神) 12 心えず侍なるへし一こころへす侍るなへし  
(伊) 13 心えす侍へし(彰) 心すみけなるへし(神)

(1)について、この歌は松野陽一氏が指摘されているように六百番歌  
合・夏三十番左歌で、俊成の判詞は「左歌、はにをく露に秋かけて  
なといへる姿詞、殊に艶にをかしく侍る哉、尤可為勝」である。六  
百番歌合判詞では「姿詞」に因して「殊に艶」と評し、ここでは  
「心」に因しての評であるが、重点のおき方が異なるだけで内容的  
には「優」ではなくて「艶」とみてよいと思われる。水無瀬殿恋十  
五首歌合・六十六番・寄雨恋・右・俊成卿女の歌  
ふりにけり時雨は袖に秋かけていひし計りを待とせしまに  
について「右の歌、時雨は袖に秋かけてなといへる文字つつきえん  
に侍るにや」と評しているのも参考になる。

ここで「殊に」とあることに注意したい。伊・松本では「まこと  
に」となっているが、一体「殊に」とか「まことに」という強調を  
あらわす副詞は「優」なる評語にはなじまないものであって、俊成

の用例からすると、「殊に艶に」(四例・六百番歌合)「いと艶にも」  
(二例・六百番歌合・千五百番歌合)「いみしく艶に」(三例・御裳  
濯衣歌合・千五百番歌合・水無瀬殿恋十五首歌合)「誠にえんに」  
(一例・水無瀬殿恋十五首歌合)のごとく見え、またこの自歌合で  
も、諸本異同のない六番・七十番・八十五番判詞に「殊に艶に」、  
十八番判詞に「いみしく艶に」とあって多いのであるが、優に因し  
ては僅かに民部卿家歌合二十番判詞に「明ほのといふ事を、今のよ  
の人の常によむ事になりたるは、ことに優のこと侍にや」とある  
を見出すに過ぎない。こうしてみると、(2)の「いみしく艶に」(4)  
「殊に艶に」(ただし伊・松・尊・彰・部・神には「殊に」はな  
い)の二例も右に準じて優ではなく艶である蓋然性が強いのであ  
る。

(4)については右の理由のほかに、この歌は狭衣物語の木歌取りの  
歌である。本歌本説歌に因して俊成が艶と評したことが多いことは  
福田雄作氏の論に指摘されたごとくであるが、この歌は狭衣物語巻  
一で、飛鳥井女君が狭衣大将を慕いつつも、乳母に欺かれて式部大  
輔道成の筑紫に下る船に乗せられ、傷心の余り身投げを思い、道成  
に狭衣大将が形見として与えた扇を見せられて

この扇を見ればただ一夜持ち給へりしなりけり。移香のなつかし  
さにたゞ袖のうちかはしたりし匂ひもかはらで、真名・仮名を誓

ませたるを、泣き泣き見れば、「渡る舟人楫をたえたえ」と返々

書かれたるは、その折は我を思つて寄き給へるにはあらじを、ただ今見るには事しもこそあれ、いかでかいみじく思えざらん、顔にあててとはかり泣かるる様、なをなかれぬべし。

楫楮絶え命も絶ゆと知らせばや涙の海に沈む舟人

添へてける扇の風をしるへにて返る波にや身をたくへまし

など思統けらるるも「物の思ゆるにや」と我ながら心憂く、悲しき事限りなし

という段の「楫楮絶え」の歌をとり、この段の女君の姿を物語的に詠じた歌であつて、本歌取りである。俊成はこの歌に右の狭衣物語の場面を想起し、悲嘆にせずみつ狭衣大将に心を寄せる飛鳥井女君の物語情調を「かの狭衣と申物語なんとおもひ出られて、殊に艶に覚え侍」と評したと思われる。それは例えば六百番歌合、冬十三番枯野

見し秋を何に残さむ草の原ひとつにかはる野辺のけしきに

の歌に、源氏物語・花の宴の鹽月夜の内侍と光源氏の贈答歌をめぐる場面情調を感じて「左、何に残さん草の原といへる、艶にこそ侍るめれ」と評した態度に通じるものがあり、やはり、優ではなくて艶であつたと思われる。右のごとく考えれば(3)の

ぬれてほす山路の菊のつゆのまにいつか千年を我はへにけん

(古今集・秋下・紫性法師)

の本歌取りの歌の評も本歌取りによる曲折微妙の感を「いくたび露のと侍る心限りなく、祝の心の上に艶にも聞え侍れば」と評したとみることができよう。

(7)に關して、所名を優または艶とした例は、六百番歌合・春中・廿七番判詞に「兩方の曙、難波わたり、高津の宮、共に優なる所どもなり」とあり、難波・高津宮を優なる所名としてゐる。また、民部卿家歌合・山花・廿三番判に「右歌三輪の山とおかれたるより、此所はもとより杉のみとりも心にそみ、えむなる事に覚え侍ればにや」慈鎮和尚自歌合、大比叡・三番判「左は、たつた山のよはの箇、右はよし野山の春風、ところのさまも、歌のすがたもとも艶」同歌合・八王寺・十番判「須磨のせきやのありあけの月、歌のすがたも所のさまも艶」などであつて、名所に關して優とも艶とも云つてゐる。この場合「哥はよそへ、其よりえんなる所の名なんと侍らねと」に對應するのは「姿詞つかひ、何となくえむにもいふにもきこえ侍るを」であつて、「えんなる所の名」を直接うけるのは「えむにもいふにも」の「えむ」と思われる。もしかりに「ゆうなる所の名」とあるならば、「いふにもえむにも」とある筈であつて、こゝも「えん」であつたとみてよい。

(5)については、美的内容からいへば艶とみるべきものと思われる

が、優・醜の蓋然性を決定する傍証はない。

以上、優・醜の異なるある判詞七例を検討してみると、六例までは醜であったと推定してよいと思われ、前述の伝本にみられる甲乙丙三類型を考慮に入れると、甲類型がもとの形ではなかったかと思われる。そして丙類型は乙類型よりも優への傾斜が強いことを考えると、書写の過程において、甲類型から乙類型へ、さらに丙類型へと優の傾斜を強めていったとみることもできるであろう。もともと乙・丙類型相互の書承関係は階本分類から否定せざるを得ず、伝本間の矛盾は解決しないのであるが、内容的には甲類型本がもとの形であったと思われる。

### 三

次に勝負付について、本自歌合階本には勝負付がなされている本がある。すなわち伊達文庫本・歌合部類本・神宮文庫本三本である。三本の勝負付を比較すると、伊達文庫本は二十五番・二十六番・四十一番・四十二番・四十九番・五十番の六番のみに勝負付を有し、これらの勝負付の内容は神宮文庫本・歌合部類本と一致する。部類本は九十九番の勝負付を欠くが、五十四番に「左持勝負」とあり、他の勝負付を有する本と校合しているので、部類本以前に勝負

付をもつ本があったことは明らかである。ところで部類本と神宮文庫本の勝負付を比較すると三十番・四十三番・五十四番・九十二番・九十四番・九十八番の六番の勝負付が相異している。このうち九十二番・九十四番・九十八番は判詞によって歌合部類本のあやまりであることが明らかである。問題の個所を掲げると、

#### (歌合部類本)

三十番

左勝 鶉

ひとりふす声の丸屋のした露に  
床をならへてうつら鳴也

右

床れいならはとはかり見まし我宿の

まかきの野へは鶉ふすまで

左、床をならへて鳴らん鶉、

まことに哥さまおかしく侍り

まさると申へくや

#### (神宮文庫本)

三十番

左勝 鶉

独ひとりふすあしの丸屋の下露に床を  
ならへてうつらなく也

右勝

床れいならはとはかりみましわかや

との雁はののへはにうつらふすまで

左の哥、床れいをならへてなくらん

うつら、まことに哥さまお

かしく侍を、右哥まがきのの

へはうつらふすまでと侍れ

は、都ておほくは人申かたく

侍れは、なをまさると申へく

や侍らん

四十三番

左 秋霜

霜むすふあきの末野のをさき原  
風には露のこほれし物を

右勝 月の哥あまたよみけ  
る中に

秋の色はては枯野となりぬれと  
月は霜こそ光なりけれ

霜結ふといへるより末句まで  
いみしく侍るを、月は霜こそ  
と侍る姿心なをかきりなくお  
ほえ侍る、ひかおほえに侍る  
にや

五十四番

左 持郎イ 冬の哥あまたよみ

ける中に

薄雲を峯にあらしの吹ためて月  
の名残を雪に見るかな

右 雪中山居

雪おれのみねの椎柴ひろふとて

四十三番

左勝 秋霜

霜結ふ秋のすゑはの小篠原風  
は露のこほれし物を

右 月の哥あまたよみける  
中に

秋の色はては枯野と成ぬれは  
月は霜こそ光也けれ

霜をむすふといふより末句ま  
ていみしくみえ侍り、光覚て  
申侍にや

五十四番

左勝冬の哥よみける中に

うす雲を峯に嵐の吹ためて月の  
名残を雪にみる哉

右 山中幽居

雪折の峯の椎柴ひろふとて跡み  
せそむる冬の山さと

あと見せそむる冬の山里

あと見せそむる冬のやまさ  
と、又ことにおかしく見え侍  
り、但左哥、月のなこりを雪  
に見るかなとはいかにも申か  
たくや侍らん

跡みせそむる冬の山里(マツ)まこ  
とにおかしく見え侍を、但左  
哥、月の名残を雪にみる哉は  
いかにも申かたくや侍らん

三十番は松・尊・彰本とともに部類本は判詞に欠脱があり、そのために勝負付をあやまったもので、このことからみて、部類本の勝負付は永仁四年本欠脱本以後の勝負付たることが明らかで、部類本のよった校合本もこの系統のものであることがわかる。四十三番は、神宮文庫本の判詞欠脱によって、神宮文庫本があやまったもの、神宮文庫本がよった本に勝負付があったか否かは明白でない。ただし奥書の「此本不審之間、以彼家御集秋篠月清集証本校合者也」とあるところをみると、あるいは神宮文庫本書写の際の勝負付書入れであったかもしれない。五十四番は判詞に小異があるが、判詞によって左勝なることは明らかで部類本の誤写とみるべく校合本による方が正しい。こうして部類本と神宮文庫本の勝負付の異同から、両本の勝負付に書承関係はなく、部類本が永仁四年本欠脱本以後に勝負付が判詞によって付されたものの転写であるのに対し、神宮本はこれとは別に判詞を斟酌した勝負付であったと思われる。

以上によって、永仁四年本系伊達文庫本に若干の勝負付がみられること、しかし全体に互る勝負付は少くも永仁四年本が転写され、欠脱本が生じて以後の勝負付であり、神宮文庫本勝負付とは無関係のものであること、また神宮文庫本勝負付はおそらく神宮文庫本書写の際に付せられたものであることを推定した。従って後京極百番自歌合の勝負付は俊成判当初に記されたものではなく、転写の過程で付されたものであると考えられる。それはこの自歌合判詞が、公的な歌合判詞と異なり、私的なしかも主家九条家嫡男右大臣としての良経への遠慮もあって、「まさると申へくや侍らむ」などの婉曲な筆使いの判定をしている態度にもあらわれているのであって、後京極百番自歌合には、もともと勝負付は付されていないと推定されるのである。

〔注〕(1) 群書解題・第八・和歌部(二)、後京極殿御自歌合解題。

(2) 「藤原俊成の研究」第二章・批評活動に関する資料・四八

○頁(昭48・笠間書院刊)

(3) 同書四八二頁。

(4) 「俊成のえんについて」(国文学叢・昭35・5)「定家歌論とその周辺」(昭49・笠間書院刊・第一章に所収)